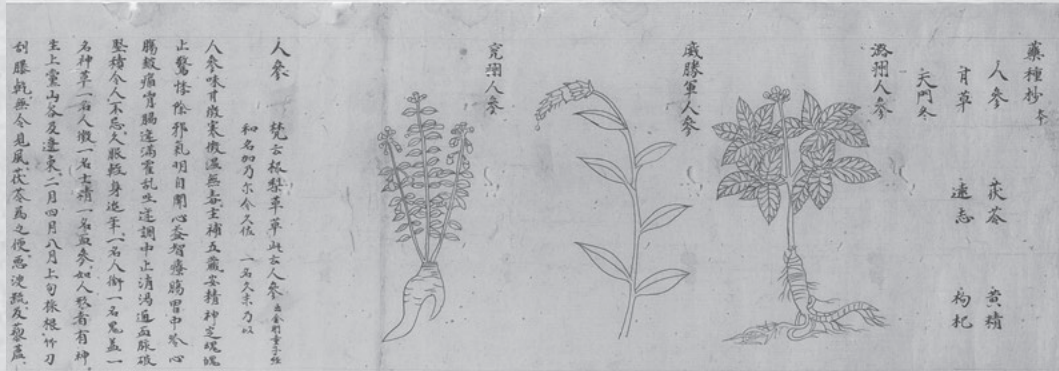




杏雨書屋(きょうりゅうしょおく)は大阪市にある公益財団法人武田科学振興財団が運営する図書資料館。国宝や重要文化財のほか、国内でもトップクラスの古医書を収蔵しています。このコーナーでは先人が古医書に残した現代に通じるメッセージを、小曾戸先生に紐解いていただきます。

# 其ノ伍 薬種抄 一人参

案内人◇小曾戸 洋(北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部 部長)



杏雨書屋蔵『薬種抄』  
(日本・1156年書写)重要文化財

人参は中国最古の本草書である『神農本草経』の上品(養命薬ともいわれ、毒性がなく長く服用できる健康を増進する生薬)に記載され、古来、神効あらたかな霊薬として重用されてきました。この薬用人参はウコギ科のオタネニンジン(Panax ginseng)で、Panaxは万能薬の意、ginsengは人参(ジンセン)のラテン語です。

『神農本草経』には人参について、「五蔵を補うを主り、精神を安じ、魂魄を定め、驚悸を止め、邪気を除き、目を明らかにし、心を開き、智を益す。久服すれば身を軽くし、年を延ばす」とその万能ぶりが記されています。人参がタケダのストレージタイプG(半夏瀉心湯)、ロクタミンゴールド(八味地黄丸加人参)、フローミンエースに配合されるゆえんでしょう。

今回ご紹介する杏雨書屋所蔵の『薬種抄』は人参の図を掲載する最も古い文献です。平安時代の成蓮房兼意の撰とされ、保元元年(1156)に書写され京都の醍醐寺遍智院に伝来した巻物で、現在、国の重要文化財に指定されている宝物です。図示したのは『薬種抄』の巻首の部分で、人参3種の図と人参の本文3行目以下は、中国宋代の『重広補注神農本草并図経』(陳承・1092年)から引用されたものと考えられます。『重広補注神

農本草并図経』は早くに失われてしまっているのので、『薬種抄』の引用はとても貴重なものです。

本文の第1行は、仏典の『金剛童子経』から引用して人参の別名(極梨草)を示し、第2行には、おそらく『本草和名』(深根輔仁・9~10世紀)を引用して和名(古来の日本での呼び名)が2種記されています。2行目に記述されている「加乃尔介久佐」は「鹿の遁草」の意で、鹿が人参の生えている場所に連れて行ってくれ、さっといなくなったという故事にちなむといえます。同様に「久末乃以」は熊胆(熊の胃)の和名と同じで、国産の人参(直根・竹節人参)に熊胆と同じような強い苦味があることに由来すると考えられます。

人参は古来、  
霊薬として貴ばれ  
多くの漢方処方に配合されて  
きました。



小曾戸 洋(こそと ひろし)

日本医史学会理事長、杏雨書屋副館長、上海中医薬大学客員教授。1950年山口県下関で小曾戸薬局を営む小曾戸丈夫氏の長男として生まれる。宋の時代に散逸した貴重書『小品方』の発見や馬王堆(まおうたい)という中国湖南省にある紀元前2世紀の遺跡で発見された医書の解読により、中国でも医史学研究で著名な成果をあげる。主な著書『日本漢方典籍辞典』(大修館書店)、『中国医学古典と日本』(塙書房)、『漢方の歴史』(大修館書店あじあボックス)。